



愛知工業大学
愛知工業大学名電高等学校
愛知工業大学附属中学校
愛知工業大学情報電子専門学校

平成 28 年秋季版

(平成 28 年 11 月 15 日)

名電高校・附属中の各卓球部とフェンシング部

「世界にはばたけ！」 全国優勝祝賀会

愛知工業大学名電高校と愛知工業大学附属中学校の各卓球部、各フェンシング部が、それぞれ夏の全国大会で優勝しました。名古屋電気学園と名古屋電気学園クラブ活動後援会は9月28日、名古屋ガーデンパレスで祝賀会を開き、関係者約250人が出席して選手たちの快挙をたたえました。

名電高卓球部は岡山県総社市で行われた全国高校総体卓球男子で、団体・単・複のすべてに優勝する完全制覇（1968年以來48年ぶり）を成し遂げました。団体戦は決勝でライバル校の野田学園（山口県）を3-1で下し、21年ぶり16回目の日本一の座につきました。シングルスは名電勢がベスト4を独占し、木造勇人選手（2年）が25年ぶり7回目となる名電のシングルス優勝を獲得しました。ダブルスは、高見真己選手（2年）と田中佑汰選手（1年）のペアが決勝で野田学園ペアを破り、名電として2年連続9回目の優勝を果たしました。

附属中卓球部は富山県高岡市で行われた全国中学校卓球大会の団体戦決勝で出雲北陵中（島根県）と対戦、3-1で勝利を収め、全中4連覇、通算10回日の優勝を果たしました。準決勝で中学のトップ選手2人を擁する野田学園と対戦、3-2で勝利し、勢いに乗っての優勝でした。同部は、これで春の選抜と合わせ全国大会8連勝となりました。

名電高校フェンシング部は、山口県岩国市で行われた全国高校総体フェンシング男子で、個人対抗サーブルの森皓己選手（3年）が準決勝の大接戦を制した後、決勝で北海道代表の選手を下し、名電として14年ぶり4回目の頂点に立ちました。



祝辞を述べる辻本昌孝副会長

東京の駒沢オリンピック公園体育館で行われた第2回全国中学生フェンシング選手権大会では、附属中が男子団体戦で前身大会の全国少年フェンシング大会を含め初の優勝を飾りました。札幌大谷中と対戦した決勝は、劣勢をはね返しての勝利でした。男子個人サーブルの加藤響選手（3年）も初優勝しました。

祝賀会では後藤泰之理事長が「期待に応えられるよう精進を重ね、4年後の東京五輪は卓球・フェンシングをはじめとした競技を名電の選手が占めるくらいの勢いで」と祝福の挨拶をしました。後援会の辻本昌孝副会長も「各校が優勝を狙ってくる大会で、優勝を勝ち取るのは大変なこと。この流れが東京オリンピックまで続くことを祈念します」と祝辞を述べました。

祝賀会の席上、優勝の各部と各選手に対して学園表彰が行われ、併せて後援会から激励が贈られました。乾杯で後援会の神尾隆顧問が「皆さんが日本の卓球、フェンシングをリードして世界に羽ばたいていきますように」と発声。各部の監督や部長から選手紹介と優勝報告があった後、名電高・附属中の岩間博校長が「選手の精神的な成長を実感した夏でした。名電高校と附属中学校が全国に、そして世界にその名を知らしめられるよう一丸となって頑張っていきます」と謝辞を述べました。



挨拶する後藤泰之理事長



表彰された各部に激励を贈る辻本副会長

2～3面に各部監督らの優勝報告（要旨）

「全員で勝ち取った日本一」

名電高校卓球部・今枝一郎監督



今枝一郎監督（右端）と高校卓球部の選手たち

団体戦準決勝の遊学館戦（石川県）では相手チームの4番手にわれわれが苦手とする選手がおり、キャプテンの松山祐季（3年）に任せるしかないと考えてオーダーを組みました。そんな中、1番の高見が日本代表である選手を相手に3-1で勝ち、2番の木造も元日本代表の選手に3-1で勝利。ダブルスは残念なことになって4、5番と回ったんですが、松山が私たちが苦手とする選手を倒してくれました。5番に抜擢した1年生の田中も同時進行の4番の試合が終わる前に相手の2番手の選手を3-0で打ち倒し、それがチームにとって大きな出来事になりました。

団体の準決勝後にダブルスの3回戦から決勝まで行われ、次の日にシングルス

のベスト8を決めた後に団体の決勝が行われる変則的な日程でした。選手たちはダブルス・シングルスとも最高の成績を上げ、私が逆に勇気づけられるほどのムードで団体の決勝に臨んでくれました。1番の田中、2番の木造、3番のダブルス（松山・木造）、4番の松山、5番の高見と組んだオーダーで、それぞれが素晴らしい役割を果たして21年ぶりに優勝できました。

前日のダブルスでは準決勝で去年の優勝ペアの木造・松山組と高見・田中組が同土討ち。プレッシャーで固さが出たのか去年のチャンピオンが負け、高見・田中が決勝で野田学園のエースダブルスを3-1で倒して優勝してくれました。

シングルスは、会場のどこを見ても名電の選手が試合をしているという快進撃でした。ベスト16に宮本春樹（2年）、ベスト8に大西尚弥（3年）、3位に田中と松山、準優勝が高見、優勝が木造と、上位を名電高が独占する夢のような結果でした。

壇上に上がっている選手のほかにも6名の部員がいます。選手より観覧席の部員の方が大変だというぐらい、対戦相手のデータを取ったり、ビデオを撮ったり、帰宅後にユニホームの洗濯をして次の日に持ってきてくれたりと、本当に全員で勝ち取った日本一でした。

11月30日～12月7日、南アフリカのケープタウンで行われる世界ジュニア代表に、木造と松山が日本代表として出場することが決まりました。日本代表4人の中の2人です。世界の舞台でも名電の伝統の力で活躍したいと思っています。今回の優勝に驕ることなく、これから全日本選手権、選抜と続く大会で、力を合わせて「強い名電」と言われるように精進していきます。

「最後まであきらめなかった」

附属中卓球部・真田浩二監督

準決勝で対戦したライバルチームの野田学園に、2枚看板と言われる最強の2人がいます。2枚看板を前半と後半に分けて使ってくるか、2枚を前に並べてプレッシャーをかけてくるか、その2通りを考えなければならず、董崎岷コーチと当日朝まで相談してチーム全体で3勝するためのオーダーを組みました。

その2枚看板を前に並べてくる結果になり、曾根翔（2年）らが頑張りましたが前半を0-2とリードされました。折り返しとなる3番のダブルスを取り、1-2となって4番の横谷晟（2年）に回り、その試合も0-2と後がない状況になりました。



真田浩二監督（右端）らと附属中卓球部の選手たち

試合後に横谷本人から聞いた話ですが、試合中に「あること」をしたので気持ちの上で負けることがなかったということです。本人から、どういう状態だったか話してもらおうと思います。

横谷選手「後がない状態になり、自分を励ますために『先に攻める』『思い切っていくぞ』とセルフトークをして心を落ち着かせました。そうすることで自分でも逆転できるという気持ちになりました」

そのような考え方になれたのは年に2回のメンタルトレーニングのおかげであり、指導して下さる先生の力に支えられていると痛感しました。ラストは主将の中村光人(3年)が気迫で勝ち取りました。

決勝戦後、観客席の保護者、応援団から「完全に追い込まれていた準決勝で、なぜベンチに負ける感じが出ていなかったのか」と尋ねられました。横谷は最初の2セットはこれまで味わったことのないプレッシャーにのまれましたが、ちょっと肩に力が入りすぎ、相手に点をあげているような失点でした。なんとか最後まであきらめなければいけないという気持ちが、私を含めて選手全員にありました。気持ちの持ち方ひとつで経過が全然違ってくるということ、あらためて痛感した準決勝の試合でした。

「絶対に優勝する」

名電高校フェンシング部・富田弘樹監督

優勝した森皓己は昨年のインターハイはベスト8でした。今年度は20歳未満の日本ランキング上位に入り、海外遠征などもさせていただいているので「絶対に優勝しよう」と本人と話していました。いつもなら伏せる「優勝」の言葉を口に出して「絶対いけるから」とプレッシャーをかけ続けました。

個人戦は47都道府県の1位の選手しか出られず、最初に5~6人で総当たり戦をしてシードを決めます。そこを順当に勝ち上がり3番シードを取りました。そこから行うトーナメントは、15本を先取した方が勝ちです。

順当にベスト4に進出し、準決勝で大分県の強い選手と対戦しました。14-14と、あと1本取った方が勝ちという状況に追い込まれ、僕の方がかなり熱くなってしまいましたが、本人が冷静に1本取り、決勝に進んでくれました。北海道の選手と対戦した決勝は15-6と、本当に安心できる試合でした。

森は愛工大への進学が決まっており、大学でも全国優勝を勝ち取ってほしいと望んでいます。高校フェンシング部も、多くの選手がこの壇上に上がっている中学・高校の卓球部と同様、次こそは団体優勝を勝ち取って大勢で壇上に上がりたいと思います。



富田弘樹監督(右)と森皓己選手

「もっと強くなる」

附属中フェンシング部・川嶋範夫部長



川嶋範夫部長(右端)と附属中フェンシング部の選手たち

個人優勝の加藤響は高校の森や尾矢陽太(17歳以下日本代表)といつも練習していたのでベスト4以上に行ければいいと考えていたところ、それ以上の成績を残してくれました。

フルーレの太田拓輝(2年)、エペの古橋諒樹(3年)、サーブルの加藤の3人が出場した団体戦は優勝など一切狙わず、ただ経験を積んでくれればいいと思っていました。太田はフェンシングを始めて1年2カ月。古橋は7か月ぐらしかエペをやっていません。太田は心臓が強く、練習でもいかにその力を発揮します。古橋は指示したことを素直にやる。この2人が負けを覚悟した場面をいくつも乗り越え、期待に応えてくれました。

決勝戦で加藤が勝ち、次の太田が1-4までリードを奪われました。相手は全国大会でも決勝に残るような選手です。すると負けず嫌いな太田は本当に負けん気を発揮し、大逆転で勝ってくれました。負けを覚悟した僕が、古橋に「次行けよ」と声を掛けると、彼は手を合わせて祈っていました。本当にチームワークで勝ち取った優勝でした。

団体優勝の感想は「本当によく頑張った」「よくあそこで一本取った」「よくあそこで負けなかった」。それだけしかありません。この子たちは強くなった。絶対にもっと強くなると思っています。

先ほど行われた全国小学生選手権大会で、理事長先生が代表を務める名電ジュニアフェンシングクラブの選手がサーブルで優勝しました。これで小、中、高とサーブル日本一を名古屋電気学園が取っています。あとは愛工大の活躍に期待したいと思います。

リオ五輪卓球男子団体 吉村真晴選手が銀メダル

「夢をかなえて帰ってきました」



4年後の活躍も力強く誓った吉村真晴選手

リオ五輪卓球男子団体で卒業生の吉村真晴選手（本年3月経営学部卒業）が銀メダルを獲得し、報告会が9月15日、八草キャンパスAITプラザで開かれました。五輪卓球団体銀メダルは日本男子初であり、学園出身者による五輪のメダル獲得も初めての快挙です。

クラブ活動後援会からも激励

後輩の卓球部員や教職員ら100人の拍手に迎えられ、銀メダルを首に掛けた吉村選手が会場へ。花束を贈られ、後藤泰之理事長から「東京五輪でさらに一つ上のメダルを」、辻本昌孝・クラブ活動後援会副会長から「活躍する姿を後輩に見せ続けて」と、祝福と激励の挨拶を受けました。

「子供のころからの夢をかなえて帰ってきました」と、卒業から半年ぶりとなる母校で切り出した吉村選手は「五輪の試合会場に立った瞬間『目指してきた場所がここで良かった』と幸福を感じました」と率直な感想を披露。「成長のきっかけをくださった愛工大の皆さんに、どうお礼を申し上げてよいのか言葉が見つかりません。やりたいことを貰ってこられて本当に幸せ者だと思う一方、今の結果に満足していない自分があります。4年後の東京五輪で、さらに高

い壁を乗り越えます」と力強く誓いました。

9月1日に交際相手の女性と入籍した吉村選手は、会場からの質問に答え「支えられ、支えなければならぬ相手ができることを自分のパワーにしています」と笑顔で報告。また、リオで対戦中に母校がパブリックビュー方式で取り組んだ応援について尋ねられると「(皆さんの声は)全部聞こえていました」と述べ、参加者を沸かせました。

終了後もキャンパスのあちこちで声を掛けられていた吉村選手は「東京五輪ではシングルス、団体ともに金メダル獲得を目指し、またここに報告に戻ってきます。打倒中国に向けてメンタルを鍛えていきます」と約束して母校を後にしました。



報告会の後、吉村選手を囲んで記念撮影

母校の応援、届けリオへ！ 八草キャンパスから熱戦見守る



ライブ放映の大画面に向かって力いっぱい声援を送る学生や教職員

OBの吉村真晴選手が出場したリオ五輪卓球男子団体の試合がライブで放映された準々決勝から、本学は八草キャンパス1号館の3階視聴覚室でパブリックビューイングによる応援を実施しました。卓球部、野球部、ラグビー部などの運動部員や教職員らが決勝の8月18日朝（日本時間）まで放映日ごとに会場を埋め、地球の反対側で繰り広げられる熱戦を見守りました。決勝は王者中国に3-1で敗れたものの、果敢に攻め抜いた吉村選手に大きな拍手が送られました。会場で応援の音頭を取った卓球部の上江洲光志主将は「一丸となって皆の気持ちを伝えられたはず。いい経験になりました」と振り返りました。

関西学生フェンシングリーグ戦で39年ぶり4回目の総合優勝

大学フェンシング部が4～5月にかけて開催された「第66回関西学生フェンシングリーグ戦」の男子1部で、39年ぶり4回目となる総合優勝を果たしました。同部は4月23、24日に京都府大山崎町体育館で開かれたフルールで優勝したのに続き、5月14、15日に大阪府中央体育館で開かれたサーブルでも優勝。5月20、21日に知多市民体育館で開かれたエペでは4位となり、総合点でトップに立って総合優勝を決めました。



トピックス

関西学生リーグで総合優勝した大学フェンシング部

団体3種目と個人戦でインカレ（11月16～20日）出場

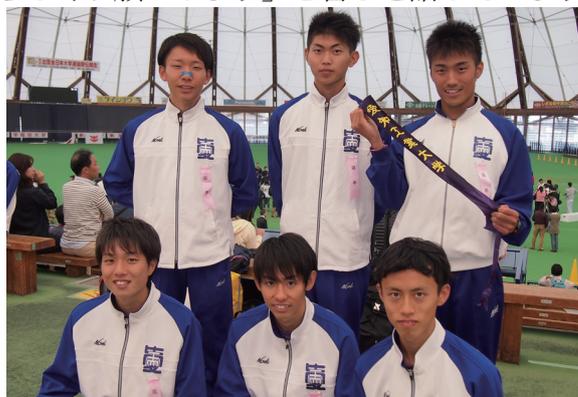
同部は10月19～23日に京都府大山崎町体育館で開かれた「第66回関西学生フェンシング選手権大会」でも団体戦のフルールで優勝、サーブルで準優勝したほか、個人戦の男子フルールで佐々木拓海選手（経営学科1年）が優勝しました。この結果を受けて団体はフルール・エペ・サーブルの全3種目で11月16～20日に京都府大山崎町体育館で開催される「全日本学生フェンシング選手権大会（インカレ）」に出場が決定し、個人戦でも佐々木選手をはじめ延べ10選手がインカレへの出場権を得ました。また、佐々木選手は10月6～10日にタイで開催された2016年フェンシングジュニアワールドカップタイ大会にも日本代表として出場しました。選手たちの活躍を受けて横井浩治監督は「昨年の創部50周年記念式典で多くの激励をいただき、おかげさまで全国を狙えるチームに成長できました。今後とも声援をよろしくお願いします」と喜びを話しています。



佐々木拓海選手

出雲駅伝で過去最高タイ

大学陸上競技部は10月10日、大学3大駅伝の幕開けとなる出雲駅伝（島根県出雲市）に4年ぶりの出場を果たし、過去最高タイ・15位の成績を収めました。松井駿佑選手（経営学科3年）、唐澤研太選手（同3年）、生川智章選手（同3年）、植松達也選手（同1年）、児玉勘太選手（同1年）、吉田新規選手（大学院1年）の6走者=写真=が粘り強きたすきをつなぎ、計45・1キロを2時間20分26秒のタイムで走り抜きました。



大会を振り返って 奥野佳宏監督

昨年12月の東海学生駅伝対校選手権大会で4年ぶり10回目の優勝をして大会出場権を獲得、中心選手で日本学生ハーフマラソン、千葉クロスカントリー大会、学生個人選手権、日本インカレなどに出場して全国レベルでの出場経験を積み重ねてきました。今年7月、10000mを8人の合計タイムで競う全日本大学駅伝東海地区予選会では13秒差で優勝を逃し、本戦出場を果たせずチームが低迷しましたが、夏合宿から競争意識の向上が見られ、特に1・2年生が力をつけてメンバーエントリーの10人中6人を下級生が占める結果となりました。

戦略としては前半に力のある関東勢、関西勢から遅れないためのメンバー構成にしました。重要選手が集まる1区の松井は予定通り先頭が見える位置の16位でたすきをつなぎ、最短区間の2区唐澤は順位を下げず各校エースが集結する3区生川へ。生川は区間14位の走りで前との差を詰め、4区植松（1年生ながら全日本インカレ3000m障害出場）も区間14位で総合順位を15位に押し上げました。5区児玉は順位を一つ下げたものの前を走る日本文理大学との差はおよそ20秒と射程圏内。最長区間のアンカー吉田は関東勢と競り合うタイムの区間11位で力走し、最後は14～17位の4チームが混戦の中、過去最高15位タイでゴールしました。

チーム目標に定めた14位にはあと一步足りない結果となり、足りない部分を埋めて再びこの出雲路に立てるよう努力をします。高校時代5000m14分台の選手が大半を占める関東・関西の大学と異なり、本学は15～16分台の選手が中心。大学時代での大きな飛躍を旨に挑戦を続けたいと考えています。



楠川愛子選手（左）・石田葵選手

全日本大学総合卓球・女子ダブルス 35年ぶりV

大学女子卓球部の楠川愛子選手(経営学科3年)・石田葵選手(同1年)のペアが、10月27～30日に長野市真島総合スポーツアリーナで開かれた第83回全日本大学総合卓球選手権大会(個人の部)の女子ダブルスで、部として35年ぶり5組目となる優勝を果たしました。

楠川・石田ペアはノーシードからの出場で84組の頂点に立ちました。大元司監督は「ノーシードから決勝まで、この2人が7回戦を勝ちきるとは誰も思わなかったのでは。3回戦から準決勝までは、専修、早稲田、同志社、中央各大学の強豪を相手に、いずれもゲームカウント3-2の大接戦。2人は1+1を3にも4にもした名コンビでした」と振り返っています。

このほか大会では、男子ダブルスに出場した大学男子卓球部の藤村友也選手(同4年)・吉村和弘選手(同2年)組も準優勝の成績を収めました。

日本卓球リーグ 年間総合4位

大学男子卓球部は平成28年度日本卓球リーグで年間総合4位の成績を収め、12月3、4日に東京のエスフォルタアリーナ八王子で行われる上位4チームによる年間チャンピオン決定戦「ファイナル4」への進出を決めました。

前期リーグ仙台大会(5月25～29日)では5勝2敗の成績を収め、2位の東京アーツに並びましたが、得失率の差で3位となりました。シングルスで6勝1敗と活躍した藤村友也選手(経営学科4年)が優秀選手賞を受賞しました。

仙台大会に先立って5月22日、八草キャンパス小体育館卓球場で協和発酵キリンを迎えてホームマッチが行われました。試合は2-3で惜敗しましたが、ダブルスの吉田雅己選手(経営学科4年)・吉村和宏選手(同2年)組がストレート勝ちしたほか、4番手で登場した藤村選手も相手の松平賢二選手を果敢に攻めて3-2で競り勝ちました。



ガッツポーズで声援を送る選手たち



優秀選手賞を受賞した藤村友也選手

後期リーグ大阪大会(11月2～6日)は3勝4敗の成績で5位となりました。大阪大会に先立って10月10日、八草キャンパス小体育館卓球場にリコーを迎えて行われたホームマッチでは、1番の藤村友也選手、2番の吉田雅己選手、3番ダブルスの上江洲光志選手(経営学科3年)・松下大星選手(同2年)が先に3勝を挙げてチームの勝利を決めました。

ホームマッチの後は会場で親睦会(5月22日)や参加無料の講習会(10月10日)があり、観戦を楽しんだファンらが、あこがれの選手と和やかに交流しました。

附属中、高校卓球部員が国際大会で優勝

11月2～6日にハンガリーのソンバトヘイで開かれたITTFジュニアサーキット「ハンガリージュニア&カデットオープン」で、15歳以下男子団体戦に2人で日本チームを組んで出場した附属中卓球部の曾根翔選手と横谷晟選手が、決勝でフランスチームを3-0で下して優勝しました。決勝では1番横谷、2番曾根、3番ダブルスのいずれの試合も3-0のストレート勝ちでした。

同大会では、名電高校卓球部の高見真己選手もジュニア男子ダブルス優勝、ジュニア男子団体3位の成績を収めました。



ダブルスで優勝した高見選手(左)・横谷選手(右)



団体優勝した曾根(左)・横谷(右)両選手

高校吹奏楽部 全日本で銀賞

高校吹奏楽部は10月23日に名古屋国際会議場で開かれた第64回全日本吹奏楽コンクールに出場し、銀賞に輝きました。8月28日に浜松市で開かれた東海吹奏楽コンクールで金賞を獲得、東海支部代表として39回目の出場でした。自由曲には交響詩「モンタニャールの詩」を選び、顧問の伊藤宏樹教諭の指揮により、アルプスの厳しい自然や人々の営みを表す曲を壮大なスケールで奏でました。演奏が終わると同時に「ブラボー」の声援と大喝采が起こる名演となりました。

同部は10月15日に長野市で開かれた第30回東海マーチングコンテストでも金賞・朝日新聞社賞を獲得し、11月20日に大阪城ホールで開かれる全国大会に出場します。



多彩な演出で楽しませた「みんなのうた“夏”メドレー」

同部は昨年にCD「ブラバン！名電」を発表して話題をまき、今年8月に国民的人気ゲームのイベント「ドラゴンクエストライブスペクタクルツアー 名古屋公演」に出演するなど、さまざまな場での演奏機会が増えています。

9月24、25日には名古屋市西区の枇杷島スポーツセンターで「豊通ファイティングイーグルス名古屋」（男子プロバスケットボールB2リーグ）の開幕節2試合のハーフタイムに出演し、軽快な振り付けを交えた演奏でブラバンの魅力をアピールしました=写真⑥。

一方、同部のサマーコンサートが7月15日に日進市民会館、19日に名古屋国際会議場センチュリーホールでそれぞれ開かれ、華やかな演奏で吹奏楽ファンを魅了しました。両会場ともプログラムは3部構成で、第3部では夏の情景の演出が次々と登場する「みんなのうた“夏”メドレー」などを披露しました。日進会場では「EXILEメドレー」で客席の聴衆が一斉にペンライトを振り、ステージと一体になった演奏を楽しみました。

「ドラクエ」「Bリーグ」・・・
出演機会も多彩に



管弦楽団が第19回定期演奏会 ロシアの情景奏でる

愛知工業大学管弦楽団の第19回定期演奏会が9月19日、名古屋市市の三井住友海上しらかわホールで開かれました。ロシアの情景あふれる選曲で臨んだ学生やOBらの団員が、迫力ある演奏を披露して約600人の聴衆を魅力しました。



迫力ある演奏を披露した大学管弦楽団

東海地方を中心に多くの演奏団体の指導に当たる中村暢宏氏を今年も指揮者に迎えました。プログラムは、リムスキー＝コルサコフの「皇帝の花嫁 序曲」に始まり、チャイコフスキーのバレエ組曲「くるみ割り人形」、交響曲第2番ハ短調「小ロシア」と展開。コンサートマスターを務める角憲明さん（機械学科4年）ら出演者たちは、合宿などを通じて培った学生らしい生き生きした音色を響かせ、客席を埋めた本学関係者や音楽ファンから盛んな拍手を浴びました。

春日井総合運動場の野球場を全面改修

学園は、高校野球部が練習場として使用している春日井総合運動場内の野球場を半年の期間をかけて全面改修し、5月15日に現地で完成を祝いました。昭和52年に開設されて以来の大改修を受けた球場は、野球部創設期に部長を務めた学園総長の名前を冠して「後藤淳記念球場」と命名されました。

グラウンドは、西側で行われていた区画整理の余剰地を取得できたことでライト方向に約15度回転させる形で拡幅し、本塁から両翼へは100㍍、中堅へは122㍍の規模になりました。これは両翼95㍍、中堅118㍍の阪神甲子園球場をも上回ります。ファウルエリアもさまざまな練習メニューに対応できるよう幅15.5㍍に広げられ、2階に観覧席がある本部席棟や、三塁側のベンチ、ブルペンなどは新たに造り直しました。ベンチ横の部屋には大型モニターを設置し、投球や打撃のフォームがその場でチェックできるようになりました。



完成を祝ったテープカット



準優勝の表彰を受けた高校野球部

高校野球部は愛知大会準優勝

高校野球部は7月30日、岡崎市の岡崎市民球場で行われた全国高校野球選手権愛知大会決勝で東邦高校と対戦、2-7で敗れ、昨年に続く準優勝となりました。ノーシードから勝ち上がり、4回戦では昨年に甲子園出場を阻まれた中京大中京高校に雪辱を果たして勢いに乗りましたが、決勝は序盤から先行される展開に。六回1死二、三塁から秋山選手のスクイズ、八回の山崎選手の中前打で追い上げましたが、東邦のエースを攻略しきれませんでした。

後藤杯卓球 650人が熱戦

第45回後藤杯卓球選手権大会（名古屋オープン）は9月17～19日の3日間、愛知県体育館で開かれました。ピンポン外交に尽力した後藤鉦二先生の遺影が飾られた会場で、全国から参加した約650人が熱戦を繰り広げました。

男子シングルスは愛知工業大学の藤村友也選手、松下大星選手、上江洲光志選手と名電高校の松山祐季選手の名電勢がベスト4を独占しました。決勝で藤村選手が松山選手を3-1で下し、大会3連覇を果たしました。

このほか男子ダブルスで百瀬卓哉選手（日体大）と組んだ松山選手が準決勝まで進み、男子ジュニアでも愛工大附属中学の曾根翔選手と名電高校の田中佑汰選手がそれぞれ準決勝まで進みました。閉会式で後藤泰之・愛知県卓球協会長が優勝した選手たちに後藤杯を手渡し「今大会の成果を次へのステップにしてください」と激励しました。

男子シングルスは藤村友也選手が3連覇



大会3連覇の藤村友也選手（右から2人目）ら

国体卓球W優勝に貢献

岩手国体卓球競技で、愛知県が成年男子の部・少年男子の部ともに優勝を飾りました。両部とも学園の選手が主力で出場し、48年ぶりとなる愛知県のW優勝に大きく貢献しました。

決勝はいずれも10月5日に奥州市総合体育館で行われ、成年男子は愛工大の吉田雅己選手、藤村友也選手、松下大星選手が山口県に3-0でストレート勝ちしました。愛工大の吉村和弘選手も山口県の選手として出場しました。少年男子の愛知県チームは名電高校卓球部の松山祐季選手が1番、木造勇人選手が2番で出場し、宮崎県を3-0で下しました。

吉田選手は10月1日の総合開会式で愛知県選手団の旗手を務めました。



勝ち取った賞状とトロフィー

高校バドミントン部の今井選手が国際大会で銀・銅メダル



銀メダルに輝いた今井大湧選手

高校バドミントン部の今井大湧選手（普通科3年）が、6月21～28日に北アイルランドで開かれたアイリッシュ・パラバドミントン国際大会に出場し、シングルスで銀メダル、ダブルスで銅メダルを獲得しました。「初めて臨んだ国際大会ですが、優勝を狙っていきました」と力強く話しています。大会には学園の海外遠征費補助を受けて出場し、上肢障がい立位の男子シングルスで準優勝したほか、正垣源選手と組んだ同クラスのダブルスでも3位の好成績を収めました。いずれもノーシードで出場し、シード選手を破っての快挙です。

今井選手は2020年東京パラリンピックの強化指定選手に選ばれ、愛知県庁で開かれた認証式に指定選手38人の1人として出席。大村秀章知事から「東京パラリンピックに出場するという強い心で競技力の向上を」と激励されました。

全日本学生カート選手権で2位

大学レーシングカート部は8月20、21日、新潟県のスピードパーク新潟で開かれた第21回L.I.K.全国学生カート選手権に参戦し、FDオープンクラスで夏目南斗選手（機械学科1年）が優勝、SSクラス（第1決勝）で角谷昌紀選手（同1年）が準優勝し、TIAクラスで細谷好輝選手（同3年）



夏目南斗選手

が5位に入賞しました。TIA、FDオープン、SS各クラスにそれぞれ2台ずつエントリーし、大学別の獲得ポイントランキングを競う大学対抗部門で2位の好成績を収めました。



角谷昌紀選手

が5位に入賞しました。



細谷好輝選手

ヨット部が10年ぶりにインカレ出場

大学ヨット部は11月2～6日、蒲郡市の海陽ヨットハーバーで開かれた全日本学生ヨット選手権大会（インカレ団体戦）に10年ぶりの出場を果たし、OB・OGの応援を受けて470クラスで22位の成績を収めました。同部は9月24、25日に同会場で開かれた2016年度秋季中部学生ヨット選手権大会で470クラス1位の成績を収め、インカレ出場を決めました。



インカレ団体戦レース中の大学ヨット部

全国大学ゴルフ対抗戦で11位タイ



全国大学ゴルフ対抗戦に出場した大学ゴルフ部

大学ゴルフ部は6月16、17日、北海道の苫小牧ゴルフリゾート72で開かれた全国大学ゴルフ対抗戦に出場し、団体で11位タイ、個人では河合和真選手（経営学科2年）が3位の成績を収めました。これに先立ち5月17、

18日、セントクリークゴルフクラブ（豊田市）で開かれた中部学生ゴルフ春季1部・2部大学対抗戦では、1部校で準優勝し、河合選手が個人トップとなる1日目70ストローク、2日目71ストロークの成績で最優秀選手に輝きました。

大学生の主な対外競技成績

(学生委員会資料)

卓球部

- ▼第16回全国百万石オープン卓球大会 4/23～24 男子団体ベスト4 Aチーム
男子シングルスベスト8 藤村友也(4年) 女子シングルスベスト16 廣木亜弥(4年)
- ▼平成28年度東海学生卓球春季リーグ戦 5/6～8 男子団体1部優勝 女子団体1部優勝
- ▼平成28年度東海学生卓球新人大会 5/14 男子ダブルス優勝神京夏(1年)・和田航大(1年)
男子シングルス優勝和田航大 女子ダブルス優勝石田葵(1年)・船本さくら(1年)
女子シングルス優勝船本さくら
- ▼平成28年度東海学生卓球選手権大会 6/18～19 男子ダブルス優勝上江洲光志(3年)・
松下大星(2年) 準優勝吉田雅己(4年)・堀大志(3年) 3位和田航大・神京夏
男子シングルス優勝藤村友也 準優勝吉村和弘(2年) 3位松下大星
女子ダブルス3位酒井詩音(4年)・石田葵 女子シングルス3位石田葵
- ▼第86回全日本大学総合卓球選手権大会 7/6～9 男子団体3位 女子団体6位
- ▼第5回「日本リーグ・日学連対抗」卓球ドリームマッチ 8/27～28
男子シングルス決勝トーナメントベスト4 藤村友也
- ▼ITTFワールドツアーチェコオープン大会 8/31～9/4
男子一般シングルス決勝トーナメントベスト16 藤村友也
- ▼平成28年度東海学生卓球秋季リーグ戦 9/23～25 男子団体1部優勝 女子団体1部準優勝

陸上競技部

- ▼平成28年度東海学生陸上春季大会 4/10 男子1500m 3位唐澤研太(3年)
男子3000m 3位 杉井駿佑(3年)
- ▼第82回東海学生陸上競技対校選手権大会 5/13～15 男子3000m障害優勝植松達也(1年)
- ▼2016年日本学生陸上競技個人選手権大会 6/10～12 男子5000m決勝22位 杉井駿佑
- ▼秩父宮杯第48回全日本大学駅伝選手権大会東海地区選考会 7/10 団体10000m準優勝
- ▼天皇賜杯第85回日本学生陸上競技対校選手権 9/2～4
男子3000m障害予選1組14位 植松達也

軟式テニス部

- ▼第92回愛知学生ソフトテニス大学対抗リーグ戦大会 5/28～29 男子2部残留(4位)
- ▼平成28年春季東海学生ソフトテニス大学対抗リーグ戦大会 5/3～4 2部残留(2位)

硬式野球部

- ▼平成28年度愛知大学野球春季リーグ戦 4/2～5/26 2部Aリーグ2位

洋弓部

- ▼2016年度東海学生アーチェリー個人選手権大会 8/10～11
男子団体本選コンパウンド部門5位 長江優(3年) リカーブ部門9位 本多和樹(2年)
10位 宮島健人(2年)

ヨット部

- ▼2016年度中部女子学生ヨット選手権大会兼中部学生オープンレガッタ 6/25～26
団体1位 石黒武志(2年)・鈴木空(3年)・別所陸太(1年) 3位 兵藤麗奈(1年)・末永征覇(2年)
- ▼2016年度中部学生ヨット個人選手権大会 7/2～3 1位 石黒武志・鈴木空・別所陸太
2位 兵藤麗奈・末永征覇

柔道部

- ▼愛知県学生柔道新人戦優勝大会 10/9 男子団体優勝

自動車部

- ▼2016DUダートトライアル 5/1 男子団体4位
- ▼2016年度全中部学生ジムカーナ選手権大会 5/22 男子団体3位
- ▼全日本エコドライブチャンピオンシップ2016 8/22 団体学生の部9位

弓道部

- ▼第50回愛知県下学生弓道選手権大会 6/19 男子団体優勝Bチーム、準優勝Aチーム
- ▼第59回東海学生弓道選手権大会 5/21～22 男子団体ベスト16 A・Bチーム

ボウリング部

- ▼第4回中部学生オープン大会 6/18 男子団体3位 青山直樹(2年)・豊田涼(1年)

レスキューロボット研究会

- ▼第16回レスキューロボットコンテスト東京予選 7/3 団体優勝

ジャグリングサークル

- ▼第28回全日本少年少女けん玉道選手権東海大会 6/5 ユースの部優勝 南亮輔(3年)

高校 12 クラブと中学 3 クラブをクラブ表彰

この夏から秋にかけて全国大会に出場した高校の 12 クラブと中学の 3 クラブが、学園のクラブ表彰を受けました。表彰式は 7 月 20 日と 10 月 19 日、それぞれ若水キャンパスで行われ、選手たちの大会での活躍を祈りました。後藤泰之理事長が各部の顧問、主将らに「頑張ってください」と励ましの言葉をかけて激励金を手渡し、クラブ活動後援会、同窓会、PTAからも贈られました。



7月20日のクラブ表彰での記念撮影



10月19日のクラブ表彰での記念撮影

表彰されたクラブは次の通りです。

◆高校◆

■平成 28 年度全国高校総体

- 卓球部・団体個人 10 人（岡山県総社市きびじアリーナ・7月31日～8月5日）
- フェンシング部・団体個人 6 人（山口県岩国市総合体育館・7月29日～8月2日）
- バレーボール部・団体 13 人（山口市の県スポーツ文化センター・7月29日～8月2日）
- 相撲部・団体個人 7 人（鳥取市の県民体育館・8月3～5日）
- バドミントン部・個人 2 人（岡山市ジップアリーナ岡山・8月7～12日）
- ウエイトリフティング部・個人 5 人（岡山県笠岡市笠岡総合体育館・8月4～8日）
- 陸上競技部・個人 6 人（岡山市の県総合グラウンド・7月29日～8月1日）

■ JAPAN CUP 2016 チアリーダーディング日本選手権大会

- チアリーダーディング部・団体 16 人（国立代々木競技場第 1 体育館・8月26～28日）

■第 40 回全日本高校ボウリング選手権大会

- ボウリング部・個人 1 人（神奈川県川崎市川崎グランドボウル・8月1～3日）

■第 52 回全国高校将棋選手権大会

- 将棋部・個人 1 人（広島県福山市福山ニューキャッスルホテル・8月2～3日）

■全日本吹奏楽コンクール

- 吹奏楽部・団体 55 人（名古屋国際会議場センチュリーホール・10月23日）

■平成 28 年度全国高校総体水泳競技

- 水泳競技部・個人 5 人

（広島市総合屋内プール＝競泳、福山市緑町公園屋内競技場＝飛び込み・8月17～20日）

■第 39 回全国 J O C ジュニアオリンピックカップ夏季水泳競技大会

- 水泳競技部・個人 5 人

（東京辰巳国際水泳場＝競泳、大阪プール＝飛び込み・8月22～26日）

■日本ジュニア・ユース陸上競技選手権

- 陸上競技部・個人 2 人（パロマ瑞穂スタジアム・10月21～23日）

◆中学◆

■第 30 回全国男子中学生ウエイトリフティング競技選手権大会

- ウエイトリフティング部・個人 1 人（福島県いわき市総合体育館・7月30～31日）

■第 2 回全国中学生フェンシング選手権大会

- フェンシング部・団体個人 3 人（駒沢オリンピック公園総合運動場体育館・7月23～25日）

■全国中学校総合体育大会

- 卓球部・団体個人 8 人（富山県高岡市竹平記念体育館・8月21～24日）

卒業生の活躍

現役2力士が活躍誓う 名電出身の親方・力士を励ます会

名電出身の親方・力士を励ます会が7月17日夜、若松親方(元朝乃若)、山分親方(元武雄山)と、現役力士の駒木龍(木瀬部屋)、大司(入間川部屋)を迎え、名古屋市内のホテルでにぎやかに開かれました。

高校相撲部監督の澤田勉教諭らが呼び掛け、毎年、名古屋場所の中日に開いています。親方・力士の4人は、参加した相撲部OBや中高生部員らの温かい拍手に迎えられ、両親方からはインターハイに出場する後輩たちに激励賞が贈られました。



若松親方(中)山分親方(右)から名電高校相撲部に激励賞が贈られました



駒木龍



大司

大司(11月場所は三段目筆頭)は「全力で相撲ができる喜びを感じながら頑張っています」、三段目力士として名古屋場所を勝ち越した駒木龍は「トレーニング方法など工夫していますので、これからも応援していただければ」と、それぞれ近況報告しました。

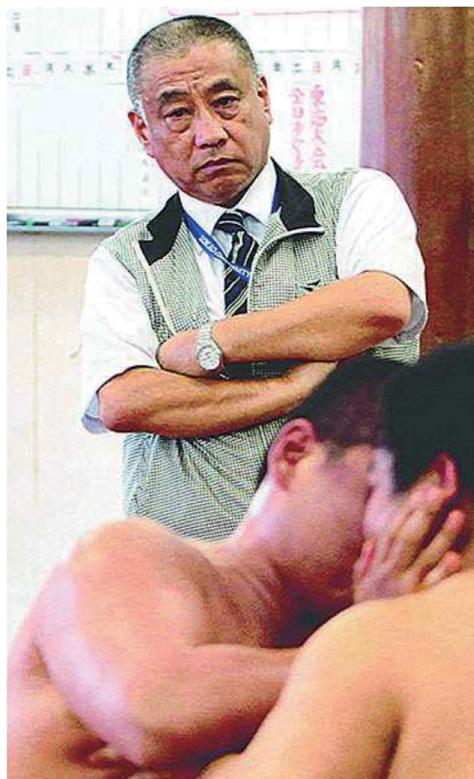
恒例となった高校チアリーディング部によるサプライズ応援や愉快的な相撲甚句の披露などもあり、日ごろ相撲協会の仕事と弟子の指導に追われる若松親方(名古屋場所担当)、山分親方(九州場所担当)も、郷土の人情に触れてリラックスした笑みを浮かべていました。

部活のマイクロバスを新たに購入

名古屋電気学園クラブ活動後援会と学園は、名電高校と附属中学のクラブ活動で共用するマイクロバスを新たに1台購入しました。各クラブの遠征や、学校と春日井総合運動場の行き来などに使用する車は、これでマイクロバス2台、大型バス3台、ワゴン車1台となり、効率の良い運用が可能になりました。購入したマイクロバスはトヨタ自動車製の29人乗りで、学園の周年に合わせて「104」のナンバーを取得しました。納車された8月3日に名古屋市熱田区の雲心寺で交通安全の祈祷を受けました=写真。



名電高校社会科教諭・相撲部監督の澤田勉先生が死去



相撲部員の稽古を見守る澤田勉先生

(写真は平成23年7月1日付の中日新聞の記事から中日新聞社の許諾を得て転載)

愛工大名電高校の相撲部監督を長く務め、大相撲の元幕内朝乃若(現若松親方)や元幕内武雄山(現山分親方)らを育てた同校社会科教諭の澤田勉先生が10月1日死去しました。63歳でした。1日開幕した岩手国体に相撲部を率いて出場し、通算30回以上出場の表彰を受けるなどしましたが、岩手県花巻市内で体調不良を訴えて帰らぬ人となりました。

澤田先生は昭和52年に名電高の社会科教諭となり、翌53年4月に相撲部監督に就任しました。部活動以上に生活態度や学習を重んじる指導を行い、同部を全国高校総体(今年で32年連続36回目の出場)の上位入賞常連に鍛えました。

通夜は10月3日、告別式は10月4日、名古屋市内で営まれ、学園や相撲競技の関係者、岩手国体の試合を終えた相撲部員などの教え子ら多数が参列しました。告別式では相撲部主将の長谷川聖記君(3年)がお別れの言葉を読み上げ、前に出る相撲を指導された日ごろの稽古などを振り返りながら「先生から教わったことを胸に部員一同頑張っていきます」と涙ながらに語りかけました。